歴史講座「松平家忠日記」より

水野家「於大」の足跡を訪ね

深溝「松平家」の菩提寺本光寺へ

今回の歴史講座は「松平家忠日記」を 2 回にわたり学ぶことで、緒川の水野家と深溝「松平家」の関係が分かり、於大の娘も家忠の子供忠利に嫁いでいることを知った。最後の 3 回目は於大が阿久比の久松俊勝に嫁いだ後、永禄 6 年(1563)蒲郡の上ノ郷城主となった俊勝とともに赴いた、蒲郡の菩提寺「安楽寺」と深溝松平家の菩提寺「本光寺」を 9 月 29 日に訪ねた。

1 「家忠日記」と深溝松平家

三河国額田郡深溝(ふこうず．現幸田町)を本拠とする深溝松平家の四代目家忠の日記で、天正 5 年(1577)10 月から文禄 3 年(1594)9 月まで 18 年間の記事がある。松平家忠には、緒川城主水野忠政の子忠分の娘が嫁いでいる。そのため日記には水野姓の武士が登場し、緒川との交流を示す記事も多くある。

松平家忠は深溝松平四代当主

天正 3 年(1575)深溝城主となる。水野忠分の娘と結婚し、嫡子誕生幼名は「お猿」後の忠利である。おかしな名前だが、この当時は.あまり良い名前をつけると魔物に取りつかれるというふうに考えられていた。

松平家の分布状態

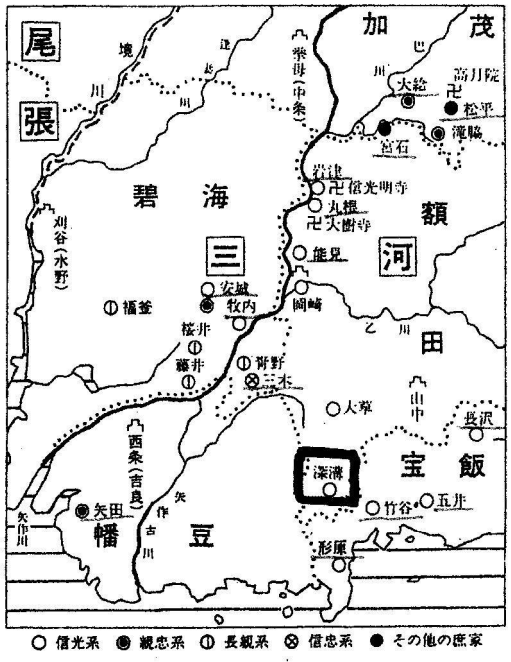

図２―65　松平諸家の分立図

家忠と深溝松平家

天正 3 年(1575)5 月深溝城主となる。

天正 18 年(1590)徳川家康の関東移封に伴い武蔵国忍(埼玉県行田市)に移る。

文禄元年(1592)下総国上代(かじろ)今の千葉県香取郡に移る。2 年後に下総国香取郡小美川城城主となる。慶長 5 年(1600)関ヶ原合戦の前哨戦である、伏見城の戦いで小早川秀秋を総大将とする西軍方の猛攻を受けて戦死。彼は茶の湯、能、連歌をたしなむ武人で、岡崎城、浜松城、伏見城、江戸城などの城壁の構築をしている。他にも方広寺の材木の切り出し、淀川の築堤がある。

家忠のあとを継いだのは 5 代忠利で、彼は久松俊勝と於大の娘をめとっている。そして三河吉田三万石の城主に。その子忠房は刈谷、福知山、を経て寛文 9 年長崎県島原城主 6 万 5900 石となり、明治維新まで累代島原城主を務めました。

家忠日記には
水野家より飛脚が来た、緒川より若者たちが来たなど水野家との交流の様
水野忠重が信元の旧領刈谷を拝領し刈谷に入城したこと
松平家忠に息子が生まれ、緒川から祝いの使者が訪れたこと
武田勝頼攻めの記事には信長は上様と記され、家康は一貫して家康と記されていること
本能寺の変の時水野忠重は京都にいたが、三河には戦死の噂が流れたこと
初物の鯨が緒川から贈られてきたとか、雨の日に初米が緒川から贈られてきたこと
……などが、さらには家康が江戸城に入城したころ水野一族も関東に移住したことが記されており、緒川との交流をしめす記述も多くあるなど当時の様子をうかがうことができる。また畑作物の初物贈与では、家康をはじめ地元の有力者や、寺社、緒川、西尾などからウリ、なすび、ヤマモモ、ささげ、まったけ、米などが家忠に贈られたことが記されている。

またもう一つ知ったことは地震のことを「なへ」と言うことだ、この言葉は日本書紀にも記されている言葉だという。天正 13 年 11 月 29 日に「なへ」のことが書かれており、さらに 11 月晦日の日記には 「なへゆる、丑刻二又大なへゆる」と書かれている。

2　家康の幼名「竹千代」の名がつけられた称名寺

9 月 29 日現地研修として深溝松平家の菩提寺の本光寺、久松俊勝と於大の蒲郡の菩提寺である安楽寺を訪ねた。9.00”に郷土資料館を出て最初に立ち寄ったのは大浜にある称名寺。この寺は港も治めるなど大きな力を持っていたという。一度訪れたことがあるが今回は説明を聞くことができた。

称名寺入り口と徳川家の墓

① 竹千代の名前の由来

この寺は藤松山称名寺だったが、今は東照山の山号をいただく唯一の寺だそうな。それと言うのも家康の幼名「竹千代」の命名された寺だからということだ。松平広忠が岡崎城にいた天文 13 年 2 月 26 日に称名寺で連歌会を催した。広忠の句に「周りは広き園の千代竹」の句があった、この時広忠に嫡男が生まれていたが名前がつけてなかったので住職に名付け親を依頼した。依頼を受けた 15 代住職其阿上人は、広忠の句から「竹千代」と命名した。この竹

千代が後の徳川家康である。連歌会場で使用した文台、硯箱、硯、懐紙、水入れ等の拝領品はいまもそのまま保存されているという。

② 松平氏のはじまり

寺伝によれば、14 世紀から 15 世紀初頭にかけて、三河の国大浜の称名寺にある日父と子の遊行僧が現れて、「時宗の修行者です」と告げた。時宗とは鎌倉時代にはやり始めた新興宗教の一つで踊り念仏と言われていた。藤沢の遊行寺で一遍という僧が開いた宗派である。この派の僧は全国を行脚して宗旨を広めたため、三河に時宗の遊行僧が現れることも不思議ではなかった。ところがこの僧の子供の方が、後に連歌の縁で加茂郡松平郷の松平信重の跡を継ぎ、松平太郎左衛門親氏となり、松平氏が始まったと言われる。つまり、松平氏の始まりは養子ということになるのだ。ちなみにその系図を見てみると……..

家康までの系図

親氏---泰親---信光---親忠---長親---信忠---清康---広忠---家康　となり、四代親忠の兄弟で五井松平忠景の子忠定が深溝松平家の初代となる。このように伝えられるが、この当時は優秀な人材がおれば引き抜いて家督を継がせるのが普通に行われていた。その意味では血筋よりも家を大事にしたということか。長男が家督を継ぐのが一般的になったのは、江戸幕府になってからと言う。

3　寺津城跡と鯖大師

次に立ち寄ったのは寺津町の寺津城跡、この城は西条吉良氏の重臣として栄えた　大河内氏の居城で永正年間(1504～1521)　に築かれたと言われている。しかし、1561 年に徳川軍との攻防で吉良氏とともに敗れ、城が取り壊されたと伝えられている。それでも大河内氏は江戸時代には幕府の重職に任ぜられて大名となり、13 代久綱からは松平姓を名乗りました。バスを降りると壊れかけた赤い鳥居の建つ横に、立派な「寺津城跡」の石碑だけがあった。

「寺津城跡」の石碑

左のお地蔵さんは右手に鯖を持っている

城跡を思い出させるものは何もなくて寂しいが、入り口に珍しいお地蔵さんがあった。二つ並んで立つお地蔵さんの、左に立つお地蔵さんの右手には魚が握られている。魚を持つお地

蔵さんは初めて見る。「鯖大師」と呼ばれるが、柳田国男の「鯖大師」によれば高僧の呪歌による奇跡を語る伝説である。徳島県海南町にある行基庵の鯖大師の像は、旅姿で右手に鯖、左手に数珠を持つ行基の異様な姿である。由来によると、行基が鯖施村を通りかかった時、馬の背で鯖を運ぶ商人と出会う。行基がその一匹を所望するが、商人はくれずにあざけり通り過ぎる。行基が「大阪や大阪の中に鯖一つ行基に暮れて馬の腹病む」と詠むと、たちまち馬は倒れてしまう。驚いた商人が先の無礼を詫びて鯖を差し出したので、「行基にくれて馬の腹止む」と詠みかえると平癒した。そこに建てたのが行基庵だという。ここの鯖大師を勧誘したのが静岡市の崇福寺で、厄除守り本尊として信仰が篤い。ただ寺で出している御札では、行基が弘法大師になっている。他にもこのような例があり、大師信仰の普及につれて、それまでの勧進聖行基が弘法大使にすり変えられていったという説もある。

4　吉良氏の領地と国宝「金蓮寺弥陀堂」

国道 247 号から西尾線沿いに北上して、西尾線の踏切を渡り少し先で矢崎川を渡った所に金蓮寺はある。吉良町で鎌倉時代と言えば、まず金蓮寺弥陀堂です。鎌倉幕府を開いた源頼朝が三河国守護の安達籐九郎盛長に命じて、金蓮寺、鳳来寺、財賀寺など三河に 7 つのお堂を造らせたと伝えられ、三河七御堂と呼ばれています。このうち現存しているのは金蓮寺弥陀堂のみです。愛知県に国宝の建造物は 3 つあり、犬山城天守、茶室如庵と吉良の金蓮寺弥陀堂です。弥陀堂はこの中でも最も古い建物です。

子供たちの写生大会でにぎわう

見る位置が違うと変わって見える弥陀堂

金蓮寺の前に着くとブルーのジャージ姿の大勢の子供たちで埋め尽くされていた。写生大会のようで、足の踏み場もない程にみな思い思いの場所に子供たちが腰をおろして、弥陀堂を描いていた。青空のもとですばらしい写生大会になり、先生たちもほっとしたことだろう。おかげでこちらは歩くのにも足場を確保するのに難儀した、でも「こんにちは」と元気にあいさつしてくれる子供たちに気持は晴れ晴れとしていた。
肝心の弥陀堂だが、現在の姿になったのは昭和 29 年(1954)に解体修理が行われた後です。それまで瓦葺であったものが、建築当時の桧皮葺に改められたのです。桧皮葺というのはヒノキの皮を厚く重ねたもので、棟から軒先にかけて美しい曲線を描いています。特にヒサシ

が長く張り出しているため、見る位置によってお堂の印象が大きく異なります。建物は非常に簡素な造りでお堂中央には阿弥陀如来が祀られています。このお堂は鎌倉時代の建築でありながら、平安時代の様式をよく残しており、日本の建築史の中でも貴重な建物であると評価されているといいます。そして、金蓮寺の古い記録によると、ほぼ 200 年に一度大修理をしている。この地は鎌倉時代から一時期を除いて、約 500 年にわたって吉良氏の領地であり、常に吉良氏の保護があった。このことが弥陀堂が残っている理由かもしれません。

この後、海沿いを走る国道わきの食事処で少し早目のランチとなった。刺身、エビフライ煮物にシジミの赤だしとなかなかボリュームもありおいしかった。満足して食事を終えて休憩していると、デザートのシャーベットがでてきた、これで 850 円はお値打ちだ。

5　ツバキの郷「本光寺」

JR 三ケ根駅東口前から山の手へ上がった所に曹洞宗の瑞雲山本光寺がある。平成 20 年の夏に三河地方を襲った集中豪雨により、墓石が大きく傾き修復の際に、記録保存のための発掘調査が行われ、小判などのお宝が出土した事が大きく報道されたことは記憶に新しい。今は花のない 5.000 本のアジサイを横目に石畳を上がっていくと山門をくぐる、正面に梅林があって背後が本堂。左手に行くと西御廟所、右手に行くと東御廟所で、これらの背後は竹林と 400 種類 1.000 本のツバキ園になっている。

① 深溝松平家の起こりと本光寺

初めに三河松平家の起こりと家忠以降の深溝松平家について少し触れましたが、三河松平家は応永年間(1394～1428)に松平太郎左衛門信重が、新田氏の支族であった徳川親氏を娘婿としたところから始まるとされています。親氏は松平家を相続し松平太郎左衛門親氏と名乗り、その子泰親が松平家の嫡流となりました。泰親の子松平信光は応永 28 年(1421)頃三河岩津の中根大膳を討ち安城城、岡崎城を攻略して松平家発展の基礎を築きました。

深溝松平家の祖は、松平信光の孫で松平忠景の二男松平忠定です。兄とともに深溝城を攻め大場主膳を討ち城主となって以来、深溝を与えられ本拠としました。本光寺と深溝松平とのつながりは、深溝松平初代忠定が享禄 4 年(1531)6 月 9 日に没し本光寺に葬られたことに端を発して以来、深溝松平家菩提寺は本光寺に定まりました。

本光寺深溝松平家墓所は、初代から五代までを祀る西御廟所と六代忠房以降 19 代忠諒までが祀られている東御廟所があります。ただし、11 代忠恕(ただひろ)は、安永 3 年(1774)に宇都宮城主から島原城主となり移封しますが、寛政 4 年(1792)正月の普賢岳噴火、4 月の眉山崩壊と津波に甚大なる被害を受け、城下を自ら視察した翌日に病を発して亡くなるという悲運な運命をたどったため、現在の西御廟所に祀られたとされています。

本堂で一通り住職の説明を聞いた後、東御廟所と西御廟所に赴き、現地で詳しい説明を聞くことができ大変感慨深いものがあった。

② 寝殿造りの墓から六角形の柩を発見、多くの副葬品も

山門前から石段を上り東御廟所入り口の門をくぐると、そこにはこれまでと違うまるで別の世界が現れた。広いエリアに寝殿造りの墓とその前には一対の灯篭が立ち、通路の石畳で区画されている。その内側には小さな平たい石がお墓の方に向いて並べられている。小判石

と呼ばれ、城主の墓の方を向いてお参りしている領民の姿を表しているという。その中に一つだけ屋根が丸みを帯びた墓があり、6 代忠房の妻の墓だという。このような造りのお墓がいくつも並ぶさまは、厳かな中にも壮観である。パンフレットには「規模も荘厳さも日本一」とあるが、言い過ぎとは思えない。

「規模も荘厳さも日本一」の東御廟所

発掘調査の行われた第 7 代の墓は、入ってすぐ左の墓だった。岡崎の石工が造ったというこの墓は、確か 3 トンと説明されたと記憶する。5 トンではなかったと思うが……いずれにしてもそんなに重いものを、人力のみで組み立てた昔の人たちはすばらしいとしか言いようがない。そのお墓の作りは寝殿造りで、社殿の下は粘性のある砂質の粘土が 1.2m つづき、その下は石灰と木炭を混ぜた層が 2.1m。その木炭が集中した部分を掘り下げると約 1.3m 四方厚さ２５cm の片岩製の墓誌を確認。そこには「肥前州高来群島原城主松平忠雄」の名前と「享保 21 歳次丙辰 2 月 7 日」と刻まれていた。
その墓誌を取り除くと、柩の外側は漆喰と木炭により埋め尽くされていました。これを除去したところ、六角形の木製の柩が確認されました。つまり遺体は寝た状態ではなく、膝を折って埋葬されていたのです。その周りからは小判 43 枚、一分金 117 枚、その下からはメガネ（レンズ 2 枚）が確認されています。さらに装飾の施された太刀、金属製のお碗、今見ても素晴らしい色あいで、男女の描かれたギヤマン製ガラスタンブラー、銀製の酒器、家紋入りの漆の化粧道具、中国製と思われる八角椀などが発見されたのです。新聞では小判のことばかりが大きく取り上げられていたと記憶していますが……当時の最高級品ばかりが現代によみがえった、すばらしい発見になったのです。
この東御廟所は元禄 15 年(1702)に建立されましたが、深溝松平家は赴任した先々に「本光寺」を建てました。しかし、今は島原とここ幸田の二か所だけに残っています。

③ 西御廟所と願かけ亀

東御廟所をあとにして山門横を通ると、「みなさん山門の屋根を見てください、この屋根の瓦は普通の右からではなく、左から葺いてあります」。よく見ると確かにそうだった、何故か。山門は江戸時代に建立されたもので、屋根瓦は厄除、災害除けのため左葺き(左瓦)に

なっているという。へえー左葺き(左瓦)と言うのは初めて知りました。
西御廟所の中心は 11 代忠恕(ただひろ)の墓で、下半分は石垣でその上は白壁造りの塀に囲まれていました。その隣には初代忠定公、2 代好景公、3 代伊忠公、4 代家忠公の墓が並んでいる。また 11 代忠恕の墓の後ろには、寛文 12 年(1672)福知山城主だった忠房が領民のため 10 年かけて建立した願かけ亀がある。この亀は参拝者の願いを聞きかなえるため、大きな耳が付いている。幅 1.5m、長さ 2.5m ほどの亀の背中に高さ 2m ほどの石碑が乗っている、その亀のエリ首にへこみがあり、お賽銭がそこに入ると願いがかなえられ、万年幸せになれるという。何人かは挑戦していたようだが結果は・・・・?

初代～4 代の墓が並ぶ西御廟所

願かけ亀

住職の説明でもう一つ記憶に残ったことは、昔本光寺はここから 500m ほど離れた東海道線の南にあったという。今そのあたりは「会下(えげ)」というが、会下とは寺と言う意味だそうで、今も各地にこの名が残っているという。

6　本堂屋根は二層の安楽寺

このあと安楽寺へ向かう、この寺は南北朝時代に本宿に法蔵寺を建てた上人の弟子が、応永 15 年(1408)に安楽往生を願い創建とされる。そして、永禄 6 年(1563)久松俊勝が上ノ郷城の城主となり、安楽寺を菩提寺と定め寺領を寄進した。浄土宗西山深草派で本尊は阿弥陀如来像、三河七福神の一つ。
バスを降りて寺に向かい、山門の大きくて立派なのに驚いた。見慣れている乾坤院の山門とは比べ物にならぬほどだ。間口 9.5m、奥行き 5.36m、高さ 13.75m の入母屋造り三間一戸、二重の桟瓦葺造りは乾坤院の山門と同じ造りだ。広い境内の向こうには一瞬「オヤッ」と思う 2 階建て造りの本堂が構えている。寺の本堂の造りがひとつ屋根ではないのがちょっと不思議な感じだった。まずは本堂に上がりお庫裡さんの話しを聞いて、俊勝と於大の位牌をまじかで見ることができたそのうえ写真も OK だった。そして、地元の歴史研究会?の方から上ノ郷城のことなどについて説明を聞いた。わざわざ今日のためにお願いしてくれたのだ、やはり唯見るだけでは分からないことが多くありがたい。上ノ郷城の絵図や見取り図もいただ

いたが、それによると城は川と丘陵地の間に円形に近い形のようだが、上ノ郷城調査区域平面図では 30m×60m ほどのエリアのように見える。久松俊勝は天正 15 年(1587)岡崎城にて亡くなり、安楽寺に葬られた。本堂隣にある墓地には久松俊勝の立派な宝筐印塔があり、見学方々お参りした。

屋根が二層の本堂

久松俊勝の立派な宝筐印塔

そして、帰る時になって「本堂の天井は意外に低かった」ことに友が気づき、お庫裡さんに聞いてみた。その答えはこれまた意外なもので「山門の屋根が本堂より高いものになってしまったので、縁起が悪いとあとから本堂の屋根をかさ上げした」という。本堂は 1630 年にでき、山門は 1752 年にできたとあるので、その後改築されたわけだ。面白い話だと思っていたら、さらに話題が一つあった。話しを聞いたお庫裡さんは緒川の出身だというのだ、不思議と於大に結びつくではないか!!

7　国の天然記念物「清田の大楠」

この後寺から 200m ほど離れた場所にある清田の大クスを見学した。おお通りの手押し信号機を押して進むとミカン畑が現れた。その向こうの方に一つ大きな木がありすぐにそれと分かる。説明板には目通り 14.3m、根回り 13.6m、樹高 22m で樹齢は約 1.000 年という。昔はこの辺りに楠の林があったが伐採されミカン畑になり、この一本が残されたという。
まるで辺りを威圧するかのようにそびえる姿は、葉も生い茂りとても若々しい? 根本に立つとその大きさを実感し圧倒されること請け合いだ。屋久島の縄文杉や紀元杉と並ぶ古木で、説明には中部地方で最大の木とある。
その大クスをやっかんでか「ここのミカンは大クスに栄養を取られてしまうのでまずい」と悪口を言う向きもあるとか。でも帰ってからこの清田出身の友がいる知人に話したら、「そんなことはない、時々ミカンをもらうが旨いよ」と言っていた。

今日はいろいろと勉強ができてすばらしい一日になった。